

氏名	栗山 齊
学位の種類	博士 (美術)
学位記番号	博美第319号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉 $\therefore 0 = 1$ - border 〈論文〉「 $\therefore 0 = 1$ 」 - 「無」と「存在」の同等性 -
論文等審査委員	
(主査)	東京芸術大学 教授 (美術学部) 佐藤 時 啓
(論文第1副査)	〃 〃 (〃) 伊藤 俊 治
(作品第1副査)	〃 〃 (〃) たほりつこ
(副査)	筑波大学 〃 逢坂 卓 郎

(論文内容の要旨)

研究概要：

本研究の目的は、自作の概念である「 $0 = 1$ 」という仮説がいかに証明され得るか、その構造や仕組みを明瞭化させることにある。同時に、その証明を成立させるために必要な要素がいかなるものか明確にする。また、今後の活動において有用な知見を得る機会を設けることも主な目的のひとつである。その上で、自作と同様に、「 $0 = 1$ 」という仮説を証明し得るものと位置づける。

私は「 $\therefore 0 = 1$ 」という共通のタイトルをもつ作品群によって「 $0 = 1$ 」という仮説を現象的に実証させることを主な制作行為としている。「 $0 = 1$ 」という仮説は、完全な「無」という状態が現実世界には存在し得ないという認識から、「無」と「存在」を同一の事象として事後的に見出すためのひとつの思考実験として提唱された。つまり、数学的に成立し得ない数式を仮説として提起し、それを現実世界と照らし合わせることにより、その正当性を証明できるものとして作品を提示している。また、そうした仮説に対する興味の根源は、人類が有史以前から抱えてきた「生」と「死」という命題にある。つまり、いつ、どこから、どのようにして生命や宇宙が「生成」し、「消滅」するのかという、誰もが普遍的に有する根本的な問いである。これらの問いから派生して、あらゆる事物における「存在」と「無」を探求するものとして「 $0 = 1$ 」という仮説を提起している。その中でこうした問いを解明するための手段として、諸科学によって実証された知見を得ている。科学は我々に一つの客観的な見地を供するが、私はこうした科学的「事実」に基づきながら、独自の世界観を構築し、その世界観の現れとして作品を提示している。

但し、諸科学が完全なる客観性を有するものでないことに注意を払う必要がある。これは、諸科学が人間によって作り出されたものであるため、それらにおける客観性もまた主観性の上に成り立っていることに起因する。つまり、科学によって描写される世界観が現実世界と完全に一致することはないのである。またこうした差異は、言語と現実世界の間においても見出せる。例えば、「無」ということばの概念と現実世界におけるその対象との間には必然的に差異が生じる。これは前述した諸科学と同様に、ことばが人間によってつくられたものであることに起因する。つまり、現実世界には「無」ということばの概念に当てはまらない「無」の現象や事象が存在する。こうしたことばのパラドックスは、「存在」と「無」が同一の事象として見出せる要因のひとつとしてあげられる。そのため、本論文ではまず、「 $0 = 1$ 」という仮説の構成要素である「0」、「1」、「=」の記号が表す概念を定義した上で、フェルディナン・ド・ソシュールの言語学を引用しつつ、言語の特質について考察を行う。

さらに、先験的な「無」に置き換わる事後的な「無」が生起していることについても言及する。例えば、現代宇宙論における「無」は、「存在」の概念を包含している。このことから現実世界における「無」が、先験的な「無」の概念に相当しないことが明瞭となる。次いで「 $0 = 1$ 」を成立させる事後的な「無」がいかなるものか考察する。その際、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの「有機体の哲学」に登場する「活動的存在」という概念を事後的な「無」の事象と結びつけ、そこから自作品の指針となる「不完全な無」という概念を導き出す。こうして形成された、新たな「無」に対する認識で現実世界を捉えることにより、一見相反する概念であり、決して交わらないと思われる「無」と「存在」を同一の事象や現象として見出すことが可能となる。

しかし、単にこれだけで「 $0 = 1$ 」の証明が成立するわけではない。なぜなら、思考実験の証明を行う主体は私自身のみならず、作品を受容する鑑賞者もまた含まれるからである。したがって、鑑賞者が作品を受容し、「無」と「存在」の同等性をイメージしたとき、はじめて「 $0 = 1$ 」の証明が成立したと見なされる。一連の作品群は、このような現象を促す触媒として作用し、鑑賞者の視点や認識を一時的に変化させるものである。つまり、証明の成立には鑑賞者がもつ事物に対する先験性と、鑑賞者の想像や思考といった能動的参与が不可欠なのである。本論では、こうした作品と鑑賞者の関係が「 $0 = 1$ 」の成立にいかに関与するのかについて、マルセル・デュシャンの活動を通じて考察する。

また、鑑賞者の能動的参与を促す作品を制作するためには、鑑賞者の受容過程を予測し、作品の情報を操作する必要がある。こうした作品受容の制御について、自作品の分析を通じて、作家の立場から考察を行う。とりわけ受容の制御における問題や矛盾がある中で、その対策としてキャプションの表記を触媒（情報）として活用する手法や、作家自身による自作の反復受容をあげ、自作の事例を通じてそれらの有用性について言及する。

最後に、自作品によって与えられる情報が鑑賞者に「 $0 = 1$ 」という受容イメージの形成を促す触媒としてのポテンシャルを有することを明らかにし、「 $0 = 1$ 」という仮説が証明し得るものであることを結論として述べる。

（博士論文審査結果の要旨）

本論文はこれまで申請者が制作してきた作品の中心概念である「 $0 = 1$ 」、つまり「無」と「存在」の同等性という仮説がどのように多面的に証明されるのかということ、フェルディナン・ド・ソシュールの言語理論やアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの「有機体の哲学」、マルセル・デュシャンの「レディメイド」や「芸術係数」といった異分野の興味深い例を上げながら、資料や素材を広くあつめ、論理的に説得力を持って検証している。序章から始まり、仮説の提示、存在と無の概念の提示、情報とイメージの関係、自作の解体解析へと進む四章から成る組み立てかたや繋がり、構成順序や文体の熟練度も問題なく、結論への道筋をわかりやすく具体的につくりあげている。以上の観点から合格とする。

（作品審査結果の要旨）

本作品は、「 $\therefore 0 = 1$ 」という共通のタイトルをもつ作品群を継続してきた申請者の最新作である。大石膏室に隣接されたギャラリーの一角を暗闇の空間として変容させ、その中に作品を浮かび上がらせた力作である。作品の焦点は、精密に制作された円筒形のアクリル容器が見せる現象にある。その容器には、ナノメータという極小の微粒子が混合された水が挿入されており、この容器の一方からは、太陽光に最も近いとされる白色光源からの光が照射されている。太陽光が七色に分解できることに見られるように、白色光源は異なる波長の光を含んでいる。照射された光が透明な円筒形の中を進む時、不可視の微粒子による拡散現象が生じる。光源側に近い方から波長の短い青色の光が拡散され、次第に波長の長

い赤色の光が拡散されていき、光源の反対側には赤色の光のみが届くことになる。その結果、円筒部分には光源側の白色から反対側にかけて赤色を増していくグラデーションが認められる。つまり、日常の体験に即して言えば、夕陽が赤く見える現象を生け捕りにして圧縮したものに近いだろう。そこには太陽の光が地球の大気圏を通過していくという壮大なスケールが封じ込められている。そして高い完成度をもった作品が静かに提示する現象の直截さとまぎれもない存在感は宇宙のひろがりへと誘う。

本作品は論文において申請者が語るように、完全な「無」という状態が現実世界には存在しえないという認識から、「無」と「存在」を「 $0 = 1$ 」という同一の事象として事後的に見出すためのひとつの思考実験に基づき、現実世界と照らしあわせるものとして位置づけられる。「無」と「存在」、そして、いつ、どこからどのようにして生命や宇宙がするのか、という「生成」と「消滅」の根本的な問いを解明する科学的知見と同期する位相をもちながら世界観を構築する独自の芸術表現を提示した博士課程の成果に相応しい優秀な作品となった。

(総合審査結果の要旨)

栗山齊は、筑波大学の修士課程在籍時よりヒューズが連続的に切れる事によって、光と音が発生する装置的な作品の制作を始めた。それは、「消滅」と「生成」が同時に起こる現象を作品化したものであり、「 $\therefore 0 = 1$ 」の最初の作品となった。

爾来、制作の根幹を成すテーマとなったが、特に本学博士課程入学以降写真技術を用いた「 $\therefore 0 = 1$ - trace of light」シリーズを集中して制作してきた。いずれもヒューズが切れる時に発する光線を写真印画紙にフォトグラムとして焼き付ける作品である。同じヒューズでありながら、個体の僅かなバラつき（例えば、メーカーやアンペア、そして同じ製品でさえも）発光によって印画紙に現れる色彩の驚くような変化に焦点を当て、作品にしたものである。

作品の鑑賞者にとって、その色彩や形状の様々な変化そのものを楽しめるのだが、栗山の興味は、あくまでも消滅する電気の導線が燃え尽きる際に生じる光が、新たに色や形を生成することにあるのである。その失われる事と、その結果生じる事の“両義性”そのものがテーマであり、また近年あった身近な“死”という現実が、その事実を乗り越えるためにも、さらにこのコンセプトを強化させたとと言える。

博士課程修了制作作品となった、「 $\therefore 0 = 1$ - border」は、大きな透明アクリルの筒に挿入されたナノ粒子の混合水に、一方から放射された白光がレイリー散乱という青空や夕日が生じる事と同じ現象により、波長の短い青は途中で消え去り、波長の長い黄色から赤にかけての光が段階を追って現れるというものである。光の現象を用いながら、見事に白から青、緑、黄、赤という連続的变化を見せることによって、全ての事物には鮮明な境界がなく、全てが地続きである事を示し、境界が有るとも無いともとれる両義性を表現する美しい作品となった。

また、論文は、「 $0 = 1$ 」と名付けられた作品のタイトル上の仮説を理論的に裏付け証明して行く。はじめに数式の定義付けを行った上で、ソシュールの言語学を援用しながら言葉の恣意性を明らかにし、さらにアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの宇宙論から論証されうる不完全な無や、東洋思想における無、“間”という無の概念も含めて、自明では無い「無」という言葉の持つ意味が、様々に論証されることによって、存在という言葉とも重なり得る事が明らかにされて行く。さらに、「 $0 = 1$ 」を作品で証明するためには、「無」と「存在」の同等性を鑑賞者が受容しなければならないとする。マルセルデュシャンを例にあげ、コンセプチュアルアートは「作品」の視覚情報が、必ずしもその中身（芸術性）と一致するものではなく、作品の知覚情報が触媒として作用し鑑賞者が想像力や思考を促され、そこでイメージが生起する。その転移の現象によって生成するものと定義する。最後に自作の解体を行い、自作は「 $0 = 1$ 」を帰納的に証明する意図に基づいて行われている事を明らかにし、「作品そのもの」が鑑賞者をして「 $0 = 1$ 」を成立させるポテンシャルを有する可能性があると結論づける。

審査会では、初期の段階から論文の想像性と完成度の高さが指摘された。数学や言語学、現代哲学、宇宙論、など多岐にわたる難解な分野に興味を抱きながらも、自作のモチベーションを喪失する事なく、身近な喪失と生成を悲しみと喜びの両義の励みとして制作と論考をまとめあげた。その栗山の努力と力量は究めて優秀であると審査の教員も認めここに高く評価する。